

---

# —青空の下で—

” NAITO ”

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

― 青空の下で―

### 【Nコード】

N4882G

### 【作者名】

“NAITO”

### 【あらすじ】

親の都合で急な群馬県立希有高校への転校をさせられた野球バカこと、高校2年生の桜井千尋。千尋は去年の甲子園大会で逆転ホームランを打ちも一つの名、『甲子園のスーパースター』と呼ばれた。ある日、千尋は希有高校へ転入手続きをしに学校へ。しかし、その学校は野球部が現在休部だということを聞き千尋は原因である野球部の顧問のもとへ。その道中。ひょんなことが起こりある女子のことが気になりだす。果たして、千尋は野球部を無事甲子園につれていく事ができるのか！？そしてその女子への行方は…。野球

と恋愛小説というベタな小説が今ここに見参！！！

## First (前書き)

どうも、お初「NAITO」です！

この小説は友人達に見せたら結構な好評をいただいたので投稿しましたー！

【野球バカ】という肩書きを持つとう主人公がお送りするちょっと変わった新感覚野球ストーリーを快くまでご堪能ください！

## First

### 【青空の下で】

それは…初夏の日差しがジンジンと照らす日の事だった。

その日の天候は勿論のこと快晴。

俺はそんな熱い日差しの下、エナメルを肩に提げとある高校の校門の前に来ていた。

「ここが…俺の転入する学校か…」

そう言い、俺はこの無駄にバカでかい高校を見上げる。

「しかし…本当にでかいな…親父の言うとおりだぜ」

俺は異常なかさを誇るその高校に苦笑をする。

つて、いかもういつそ学園とでも称しておかしくないだろ……

「……。」

俺の名は桜井千尋【さくらいちひろ】野球バカの普通の高校2年生だ。

親父の急な転勤で家族はまきぞいをくらい

ここ、群馬県の県立希有高校に猛反対したのだが……強制的に転入することになってしまった。

今日はその転入手続きをしにここにやってきた訳なのだが…。

「まあ…どちらかというと転校して…ある意味正解だったかな…。」

なぜ、ある意味正解なのかと言うと…俺には、ある禁則事項的な秘密があるのだ。

そう…それは…

ヲタクなのである。

「いやゝ…決してギャグで言ってる訳じゃないぜ？」

これは本当のことなのだ。

このヲタクのせいで、ここに転入してくる前の学校、広島県にある私立錫風高校ではほとんど誰とも話が合わず友達も少ない方だったのだ。

いたとしても同じ野球部員の連中と特別な人くらいである。

「でもな…本当は転校したくなかったんだよね。なんつうか…あの高校は結構野球強い高校だったし…それに…数少ない友人も…」俺はその場で頭を抱え、しゃがんだ。

いや、野球バカの俺がその高校を離れたくない理由も分かるだろう？

「……。」

あゝ、ちなみに…余談だが…錫風高校は甲子園に出場した回数は過去15回もある有名高校で、

広島の方では今年の甲子園出場NO.1候補の高校なのでもある。

………非常にもったいないね。

「あゝ、なぜ俺はこんな不運なんだ…ヲタクだからか？ヲタクだから不運なのか…！？………それに、あいつとも離れちまったし…！」なにかむしゃくしゃしてきたので俺は立ち上がり校門のそこら辺に置いてある石を思いつき蹴った。

「………痛ッ！意外と痛ッてえな………」

当たり前！石は硬いとは思っていたが…まさかこれほどだったとは………。

「……。」

………いや、それとも俺が強くなりすぎただけか？

しかし………石は今にも「へへん」とでも言いそうな感じがた。 (実際は言うわけねえけどな、分かるとは思うが。)

「……。」

………なんか石に負けたと思うと多少むかつくな…。

「………つて、………ん？」

ふと…俺は蹴った足のほうからなにか違和感を感じる。



もう半泣き状態だ。

いや……バカみたいに大声だして叫んでるけどさ……本当に痛いんだぜ？

そんな俺が路上のと真ん中でごろごろとしていると……

「こら、君そこで何をしている！そこは道路だぞ！車を通ったらどうする気だ。」

「……ん？」

……不意に誰かから声をかけられた。

その声の主の位置は真上からした。

俺は涙を目に溜めながら声のした方向へと向ける。

……するとそこにはこの学校の教師かと思われる髪はショートヘア  
―色は茶色、身長は174cmはあろうと思われる眼鏡をかけた中年男性が仁王立ちをしていた。

「……！！？」

俺は足の痛みをガマンし、すぐさま起きあがった。

「え……いやゝ。何もしてないっす。」

左右にゴロゴロ転がっていたのに何もしてないと言うのは我ながら  
実におかしい言い訳なのだが……

いちをバレてないと確信して発言してみた。

「嘘をつくんじゃない！石を蹴り、痛い痛いと言き喚いて左右にゴ  
ロゴロと転がっていたじゃないか！」

どうやら……バレていた。

しかも一部始終まで完璧である。

俺は、『いつから見てたんだよこの人……』などと思いながら心の  
底で少しだけ悔しかった。

すると中年男性は俺の目の前で立膝をつきながら言った。

「足お押さえていたということは……もしや爪が割てるんじゃないの  
か？」

「……。」

……なぜそこまで分かる……。

ひょっとしてこの人は……アニメに出てきそうな超能力者とかその類の人物だったりして……。

「……。」

それだつたらなんだ……？

急に「そのケガを治したら、ご恩として今現在宇宙では超能力者同士宇宙戦争をしている。……だから君もきてくれないか？」なんて言われるかもしれん……。

その時はその時で是非ともお供したいね。

しかし……そうなればまるでアニメみたいな展開だな、うん。

そんな俺が半ば期待をしていると……。

「どこの高校生だ？一見見ると……ここの生徒ではないらしいが……、とにかくその足を見せなさい！自分は、国語教師兼保健の教師だからな、大抵のことは分かる。」

え、前言撤回。

……どうやら……超能力者ではなかったようだ。

って、いうか……自ら「俺は超能力者だ！」とか名乗るわけないわな。

「……。」

しかし……保健の教師だとしても……見破ったのは相当凄いな……。俺はなにも抵抗せず地面に尻をつけ靴下を脱ぎ、爪の割れている足を中年男性に見せた。

「うわ……これはひどいじゃないか……、何処の高校生かは後で聞く。とにかく今は手当てが優先だ」

すぐにここの保健室について来なさい。」

そついい中年男性は立ちあがった。

「え、あ……。」

治してくれるのはありがたいのだが……あまり迷惑をかけたくなえな。

「……。」

俺は強がろうと頭の中で懸命に言い訳を考える……

「……………はあゝ。」

だが……………思いつかなかった。

まあ、仮に大丈夫です的な発言をしたとしても「足の爪が割れたのになにが大丈夫なんだ！」的なことを指摘されて強制的に連れていかれるだろう。

……………って、どちらにしろ行かなきゃならねえじゃねえか。

「どうした？…行くぞ？」

既に学校へと歩いていった中年教師はふりかえって俺に問いかけてきた。

「……………仕方ないな。」

俺は適当に返事をし、中年男性の後を追った。

## Second (前書き)

どうも、"NAITO"です！

第二話お届けします。

第一話、楽しんでいただけたでしょうか？

たぶん読者の方の中には「これ、展開早いだろ…？」などの疑問を抱いたかと思われます。

…が！

勘違いですb

それでは心ゆくまで堪能ください！

## Second

中年男性はこの学校の職員玄関かと思われるところに俺を招いた。中に入ると冷房完備が整っていて天国といったも過言ではないほどの心地良さであった。

「これを使ってくれ。」

入ったすぐ隣手にあるスリッパを俺に差し出してくる。

……え……これって履けって……ことでしょうかね？

中年男性は目を丸くさせた後……

「それ以外何に使うと言うんだい？」と苦笑しながら言った。

……やっぱそうだな。

まあ、試しに試してみたたださ。

俺は言ってしまった後悔と少しの恥らいを感じつつスリッパを履いた。

「さて、こっちだ、ついて来なさい。」

俺は適当に返事を返し、学校の奥へ奥へといった。

\* \* \*

校舎内は見た目より本当にでかく、俺はそこでかさに気圧されてしまった。

……本当に学園といっても過言ではないくらいなものだね。そして長い階段を上り、広い廊下を歩く……

校内はひんやりはしていたもののやたらとなぜか汗がでてる。一体いつつのだろうか……？

「もうすぐ着くよ。」

そんなことを先導で歩いている中年教師がいいやがった。

俺は安堵の息を漏らすのだが……

「……。」

そしてもうすぐといいながらも約500メートルほど歩かされただろうか…… やつとこさついた。

俺は肩で息をする。

……相当だぞ、これ。

「ここが保健室だ、早く入りなさい、手当てをしてあげるよ。」  
そついい中年男性は軽く微笑んだ

……しかし……なんでこのお方は全然疲れていないのだろうかね？  
やっぱり慣れなのだろうかね……？

俺は額から出てきた汗を手の甲で拭きながら保健室に入室。  
すると……

「……で、でかッ……！」

素で俺は目の前の光景に驚いた。

……ここまでくればなぜ驚いてるか分かるだろう？

保健室の敷地面積が以前いた錫風高校の自分のクラスの敷地面積の  
二倍くらいの規模があるのだ。

まあ、もつと分かりやすく言うと…… 普通の家のリビング約10個  
分(?)

「……。」

俺は目を疑い、自分が幻覚を見てないかと一度目を擦った。  
だが……

もちろんのこと変わらない。

「どうした、こんなでかい保健室を見るのは初めてか。……ま。ムリ  
もない、この学校全体の規模は群馬で一番だからな、ははは。」

中年男性は頭に手をやりながら自慢気に笑った。

いや、はははじゃねえだろ…… こんな保健室だけのために金かける  
必要はあるのか……？

しかも、落ちついて見てみれば…… 何も置かれていない個所が結構  
あるんだが……。

「……はあ。」

思わずまたも苦笑まじりの溜息が漏れた。

「それじゃあ、ここに座ってくれ。」

中年男性は茶色の長方形の腰かけのない高級そうなソファアを指指した。

俺はそれに従い、そこに座った。

……そして俺は中年男性に手当てをして貰った。

少し手当てが雑だったことは心の底にしまっておこうか……。

「ありがうございました、おかげで助かりましたよ。」

まあ、とりあえず……手当てしてもらったことには変わりはないので心から感謝をした。

「いや、いいんだよ礼なんか。…さてと、手当ても終えたし…そろそろ教えてもらおうかな。たしか…まだ君の名前を聞いてなかったね、なんて言うんだい？」

「…え？」

……現在の日本国では……まず自分から名乗るのが常識じゃなかったっけ…。

「……。」

……まあ、手当てをして貰った身だからな……名乗るか。

「俺の名前は桜井千尋です。え…趣味は、野球です。」

俺が自分の名を述べた瞬間、中年男性は眉をよせた。

「き…君がここに新しく転入してくる桜井君かな!？」

「……?あ…はい…そうですか?」

……なぜ知っている?俺、そんなに有名だったっけ…。

すると突然中年男性の表情が驚くほどに明るくなり、今の体勢を正した。

……一体何なんだよ。

「よ…ようこそ我が県立希有高校へ。あ、自分の名は斎藤望【さいとうのぞむ】です。ちなみに、斎藤の斎は難しい斎ですからね、覚えておいてくださいよ。」

「……へ、は……はあ。」

いきなりかよ……。

「……。」

しかし……バカだから斎藤の斎という字も頭に浮かばないね。

いや、バカって意外と不自由なことあるんだな……。

「いや」。それにしても、去年の甲子園、自宅のテレビで見ましたよ。当時君一年生だったのでしょうか？ ああ決勝戦で決めた一発はすごかったですよ！自分群馬人なのに君の高校を応援しちゃいましたよ。」

「ああ、それは……ありがとうございます。」

俺は軽く会釈をした。

……我ながら恥かしいことだが……そうなのである。

俺は『野球バカ』『野球が上手い』なので、錫風高校の有名監督からも良い評価を得。入部当初でレギュラー入りをする程の凄腕でなのだ。

そして、去年の甲子園にスタメン出場し、決勝戦で逆転2ランホームランをかまし、錫風高校はめでたく20年ぶりの優勝に貢献させたのだ。

……だから俺の名前を知っていたって訳ね。

すると斎藤先生とやはまた眉をよせた。

「……しかし、なんでその桜井君がここに転入してくるんだい？」

……そのことまで聞きますか……。

あまり言うのは気が引けるが……目の前には目を輝かせているからなあ……。

「……。」

しょうがないか……。

「……簡単に言うって親父の急な転勤のせいで俺達家族はまきぞいをくらって引っ越してきたって訳ですよ。」

「そうか……でも、ここ来ても『野球部はない』のに……。」

「……え？」

……急に寒気がした。

俺の耳の中の鼓膜の震動が常人より衰えてなければそう聞こえたんだが……？

「……。」

……もう一度斎藤先生の発言を確かめてみる。

「今、なんて言いました……？」

「え……？いや、だから……『この希有高校には、《野球部はない》よ』と言っているんだよ。しかし本当にもつたいないな、桜井君は。」

その瞬間、俺の頭は真っ白になった。

いや、当然だろう……？

わざわざ勉強を捨てて（もとからやる気ないだけだけどな……）この野球にしか一生をかけていない俺の耳に入ってきたのが『《野球部はない》』なんて言葉じゃ混乱するさ。

……この学校に何しに来たんだっていう話になる。

俺は我を忘れ、斎藤先生の襟をつかんだ。

「え……ぬお！？」

「や……野球部がないって本当ですか！？ねえ！？ねえ！？」

俺は斎藤先生を押したり引いたりする。

こんなことはするつもりはないのだが……

なんだろうか……俺の脳がそいつた命令を下さない。

「ま……待つんだ！桜井君！落ち着きなさい！」

『ガンッ！』

「ゴフッ！」

斎藤先生はそこら辺にある物に頭をぶつけた。

「……あ。」

その瞬間、やっとこさ俺は我に戻った。

……やっちまったよ。

「す、すみません……つい……」

俺は即座に立ちあがり頭を下げた。

「うん……い、いや、いいんだ。少し大げさに言い過ぎたよ、いてて……」

斎藤先生は苦笑をしながら乱れた襟を整えた。

「まあ……桜井君には知つとくべきことかな……詳しく聞きたいかな？」

俺は頷いた。

まあ、今からこの野球部に入る身だから……詳しく聞いておいても損はないだろう。

「よし、分かった……話そう。」

そついい斎藤先生は姿勢を再度正した。

### Third (前書き)

毎回×2前書きを書き続けることに疲れてきた作者、〃NAITO  
〃です！

え、まだ三回目？

いや、もう自分的には十分頑張りましたって。

と、いうわけで……。

次回からは区切りよく。

10話ずつ前書きを書きたいと思います！

まあ、能書きを並べても意味はないので……ここで終わりますか。

それでは第三話！

ご堪能あれ！

また10話でお会いしましょう！

### Third

俺はツバを飲み込む、ある意味不気味な緊張感がこの保健室に漂った。

「……………」

すると、額になにかたれてくるのを感じた。

俺はそれを拭って確認してみる。

「……………」

……正体はまた噴出してきた汗だった。

さきほど暴走しただからであろう。

俺は手の甲についた汗をカッターシャツで拭き取ったと同時に斎藤先生が語り始めた。

「まあ、ここには……いちを野球部はあるんだが……部員がな、部活に参加してないんだ……まあ……言い換えると幽霊部員状態だ。」

幽霊部員、ね……。

いや、しかしなぜ幽霊部員に……？

俺は尋ねてみる。

「……そうなった理由は……なんですか……？」

「……さあ？……自分にはそういったことは分からない。」

「……どうしてですか？」

また俺は質問を投げた。

「自分は……陸上部の顧問なんだから……分かってる事は……部員が来てないって事だけだ。」

そっつい斎藤先生は俯いた。

なるほど……俺が以前いた錫風高校と同様、各部活には顧問が健在していることは分かった。

「……………」

……それじゃあそんなピンチな中、野球部の顧問は一体何をしているんだ……？

俺は何かしらのヒントを得るべく思いきって尋ねた。

しかし……なんだ、この推理小説的な展開は。

まあ……事件としてはめっちゃ小さいけどさ……

「……この野球部の顧問は誰ですか？」

斎藤先生は再び顔を上げ俺の質問に答えた。

「ああ……言ってもどの先生か分からないと思うが……いちを君は野球部に入る身だからね、

早めに教えといてもいいな。……顧問の先生の名前は嶋崎武【しま

ざきたけし】先生だ。」

……またずいぶんとごっつい名前だな。

「……ん？」

斎藤先生は何かを思いあたったような顔をした。

……一体どうかしたのでしょいか？

「そういえば……見た事があるぞ……」

斎藤先生は急に立ち上がった。

……一体何が分かったの？

「1年前の話なんだが……自分たち陸上部の練習場所は野球部の隣なんだ。それで……ある日のことなんだが……嶋崎先生が野球部の部員に恐喝をしていたんだ、右手にバット持って、こう……地面を強く叩いて……。」

「な……！？」

斎藤さんは当時嶋崎がしていた行動をディスプレイで再現した。

……確かにそんなこととしてちゃ部員も流石に嫌になるわな……

「たぶんだがな……！？……そういえば……これも見たことがある！」

斎藤さんは推理探偵の人の如く。手をあごにそえ、眉をよせた。

俺はそれを見て、なにか変な胸騒ぎがした。

「……なんですか？」

「部員をパシ使った件も見たことがある。それで1時期保護者と問題になったんだが……」

そんな保護者問題に発展するほどその……嶋崎っていう先生は悪人なのか…。

「その件は…嶋崎先生が保護者と話しをしないから……今だに保留なんだ…。」

俺は眉をよせる。

……道理で部員が来ないわけだ……

俺は半ば呆れながら真剣に悩む。

「あ、あの……桜井君…?」

今斎藤先生は俺に問いかけたような気がするが……

まあ、流しておくか……

「……。」

……しかし、野球部がなかったら……それはそれで困ることだ。つまり今、俺が持っている目標の甲子園に出れなくなってしまうという事。

……そして、《あいつら》との約束を破る事にもなってしまう。

それじゃあどうする？

「……。」

『こうなったら……直接話をつけるか…。』

そんな考えが俺の頭に過った。

……まあ、本人に会って言ったほうが最善でなおかつ手短な道だ。

「……うっし。」

俺は決心を固め、顔を上げた。

こうするしか……方法はないだろう。

「……斎藤先生。」

俺は立ち上がる。

「いやですね、今は斎藤さんでいいですよ。なんです?」

「あゝ、えゝつと……現在その先生は何処にいます？」

「え？……まあ、今日は夏の補習だからね、2年C組で生徒に勉強教えていると思うよ？なぜそんな事を？」

2年C組か……一体何処だ……？

「……いや、なんとなく聞いてみただけですよ。」

場所は知らんが……俺は尋ねなかった。

……これ以上他人に迷惑をかけたくないしな。

早速俺は2年C組に向かうべく保健室の出口に向かって歩いた。

「それでは、斎藤せんせ……じゃなくて斎藤さん。手当てありがとうございます。」

俺はそれだけを言い残し、保健室を疾風の如く出ていった。

「ちよつと待つて！どこいくんだい！？——つて……いつちゃったよ……」

俺が出ていった後、斎藤さんは一回大きく溜息をついた。

「ん……？桜井君、バッグ忘れていつちゃってるよ。」

ふと、傍らにあった俺のエナメルに目をつけた斎藤さんはそれを持ち、

「でも桜井君、なんのために嶋崎先生の場所を？……なんだか嫌な予感がするな……」

冷や汗をかきはじめた。

「……しょうがない……持つていくか。ええつと……俺の予想があつていれば……桜井君、無事着いてるといいんだが……」

そう言い、斎藤さんも保健室を出た。

\* \* \*

「で……ここは何処だ。」

……迷ってしまった。

まあ、あの時なんかと思うていたのだが……。

見事にこのザマだ。

「……笑えねえ。」

原因は……怒りがだいぶ込み上げていたせいか闇雲に走りすぎたものだと思われる。

こんな迷うことなんて小学校ぶりなんだが……？

「……って、そんなこと思っている場合じゃねえな……。」

俺は苦笑した。

しかし……あの時、斎藤さんに2年C組は何処にあるか聞いとくべきだったね……今更ながら。

俺は顔の前に握り締めた拳もってきて悔しがる仕草をする。

……しかし、いつまでも悔しがっていても状況は変化しない。

……今からどうすればいいんだ？

「うん……。」

俺は頭をフル回転させて悩んだ。

……その時、脳裏にある言葉が過った。

『……迷ったときは走りまくれ!!』

その言葉は俺が幼年時代の頃……デパートで迷子になった俺が迷子センターを通じたおかげで無事父親に引き取られた時のことだった。俺は再び出会えた喜びで父親に抱きつこうとしたその時。

『バカ野郎!!!!』

唐突に俺の頬を叩いてきたのだ。

その音に周りの買い物客から視線が集まった。

そんな視線を気にせず、父親は俺に言ったのだ。

『……迷ったときは走りまくれ!!』

と……。

それを言った瞬間……なぜか周りから拍手喝采が起こった。

……いや、しかし今思い返すと……完璧な黒歴史だな。

「……。」

……って!!今そんなことを思っている暇じゃねえ!!

いちを、何もしないよりマシな方法なので仕方なくその言葉に従い走ってみることにした。

\* \* \*

この学校は5階建てもあり、更に廊下は縦230メートル横5メートルもある広大なもので

2年C組を見つける前にまず体力に限界が来るだろうと思った。（現に少し辛くなってきた…）

そこで俺はこの生徒に聞き出すことにするという策をたてた。我ながら完璧だ……。うん。

俺はすぐさまその策を実行させた。

……だが。

「……誰もいねえ。」

走っても走っても誰とも会わないのだ。

補習の生徒はいるとはいっても……流石に夏休みだからそう簡単に生徒に出会えるわけではないか……。

「……ん？」

ふと、俺の左手になにかが現れた。

「…これは……。」

それは、階段だった。

「……ええーっと……2年だからな……上の教室だろ……ここは上るか。」

俺は勢いよく2段飛ばしでかけ上がりその勢いを使い、右に方向転換し走り続ける。

と、その時右手の方から突然印刷用紙を持つ人影が現れた。

「……？………ちょあぶないっ！」

この速さでは急には止まれない、このままでは衝突してしまう。

「くそっ！」

俺は急転換をしそのままっすぐ走り背中から入るように壁に衝突した。

「きゃっ！」

その人物は突然の出来事に印刷用紙を落とした。

「げふッ！」

俺は、外国映画のワンシーンの如く、壁におもいきり背中をぶつけた。

意外と痛い……！

「え……ちよつ、ちよつと大丈夫ですか？」

「……な、なんとか。……ん？」

見ると、その人物はこの学校の生徒と思われる女子だった。

灼○のシャ○にいる吉○一○、CL○N○ADでいうと古○渚……  
みたいな感じの美形だった。

いや、しかし本当によく似ているな……。

「……。」

で、見とれている場合じゃねえな……。

周りを見ると、結構な量の紙が散らばっていた。

俺は即座に散らばった紙を拾い集める作業にとりかかる。

その吉○一○。似の美少女も共に拾う作業をしてくれた。

そこで2分くらいの時間を消耗しただろうか。

ようやく全てが拾い集まった。

「いや、本当にすみません。」

拾い終えた俺は謝罪の言葉をいいながらその女子に紙を渡した。

「いいえ、いいですよ。……でも今後からは気を付けてくださいね。」

女子は印刷用紙の持っていない右手を腰にあてムスッとさせた表情で言った。

「あ、はい。……気を付けます。」

ついこの表情を見るとバカ丁寧に謝ってしまうね……。

俺は苦笑をしながら思った。

「それでは、私は用があるんでこれで。大丈夫なら…安心です。」

女子はクスッと笑い、その場から立ち去ろうとする。

俺はその背中ごしに謝罪の意味も含めて手を振った。

「……。」

しかし…なにかとつても大事なことを忘れているような……

「……あー!?!」

俺はすぐさま思い出した。

気付いた俺は咄嗟にその女子の背中に叫ぶ。

「あ、ちょ、ちよつと待て下さい!!!」

俺は手を前に出し待てという仕草をつくった。

「はい? なんですか?」

俺は手を下ろす。

「2年C組は……何処ですか?」

「はい?」

女子はそれを聞かれたときは目をでかく開きキョトンとしていた。

……まあ、唐突な質問だからキョトンとするのも無理はないか……

「2年C組です…か?」

女子は千尋の問い質した質問を再度確認した。

「はい、2年C組です。」

ようやく理解した女子は前方を指指していった。

「ええっと…そこを右に曲がって3室目の教室が2年C組ですよ。」

「あ、分かりました。色々すみません。」

俺は頭の後ろに手をやりながらそう言った。

「いいいえ、いいですよ。困ったときはお互い様です。」

女子は犯罪に近い笑顔を振りまきながら言った。

「それに、来校者に物事を教えるのは私の趣味ですから。」

……いや…趣味——…って、今の俺にはどうこう突っ込んで

いる場合ではない。

俺はこの会話を切り上げるべく別れを告げる事にする。

まあ、少し惜しい気もするが……時間の関係上仕方ない事さ。

「じゃ、俺はこれで、それでは。」

「はい。お気をつけて」

女子は笑顔で手を振った。

振り返さないのは失礼だと思うので俺も反射的に手を振り返す。

そして、本日2度目となる疾風の如く走り去って行く。

俺が去った後……ふと女子は呟いた。

「でも……私のクラスの2年C組に何の用でしょう……？」

\* \* \*

現在、俺は女子の教えられた通りに進み2年C組をめがけ走っている最中だ、

廊下にはバタバタという足音だけが響く。

「えっと……2年A組……2年B組……2年……お、ここだ！」

キーっという効果音をたて2年C組のスライドドアの目の前で止まる。

「ふー……」

俺は一回大きく息をはいた。

なぜか……むしように緊張してきた。

「……ここが2年C組か……嶋崎って野郎を見つけたら話をつけてやる。」

俺は目つきを変える。

嶋崎に言うために……。

人生にすべてを捧げてきた野球をそう簡単に潰したくはないからな。

「……」

そして俺はスライドドアのところに手をかける。

……開けるか。

俺はスライドドアを勢いよく開けた。

## Fourth

『バタンツ!!!』

その音は補習中の静かな教室全体に響いた。

その音に補習中の生徒、そして嶋崎かとおもわれる角刈りのグラサン男性教師がこちらを見てキョトンとしている。

……少し強く開けすぎたか……？

「……………」

つて、そんな些細なことを気にかけている暇はねえな……。

そのまま俺は男性教師に歩みよった。

「な……なんだお前は、今補習中やぞ!？」

親譲りの恐ろしい目つきのせいか……気圧されたのか男性教師は1歩後退する。

「貴方が……嶋崎武先生ですか？」

俺は低い声でそう尋ねた。

「そ……そうだが……お前は誰や!」

なるほど……この関西弁と標準語が混じった野郎が嶋崎ね。

確認した俺は自己紹介をする。

「俺は……明日ここに転入してくる桜井千尋です、趣味は野球」

急に生徒はざわめきだした。

「……ほほう、お前が噂の【甲子園のスーパースター】、桜井千尋か……すまんが……ここは入学手続きをする場所ではない……するなら校長室へ行ってもらおうか。……もしかして……迷ったのか？気の毒なこった。」

そついい嶋崎は苦笑した。

……なんだか俺小ばかにされているような……。

まあ、それも気にはせず俺は話しを続けた。

「手続きは後からやるつもりです。俺は……貴方に用があるんです。」

嶋崎は眉をよせる。

「ほう…なんだ。」

俺は一回大きく深呼吸をし、そして嶋崎に言った。

「貴方は…この野球部の顧問ですよね。」

「…なぜお前が知っているか分からんが……まあ、その通りだ。…  
…なんだ、俺が野球部の顧問で不満か？【甲子園のスーパースター】  
さん。」

また少し笑う、俺を小ばかにする嶋崎の言い方がツボにでもはまつたか、生徒もクスクスと笑いだした。

しかし俺は気圧されずに…

「……ああ、十分不満ですよ。」

と、言った。

その瞬間、周囲が静まりかえった。

「……なぜ不満や。……言ったからにはちゃんとした説明をしてもらおうか？」

嶋崎はチョークを黒板の溝において手を払いながらそう言った。

まあ、説明はなんとか予想内の展開だったので俺はサラッと答えた。

「……その野球部は…部員が部活に参加てないらしいですね…違いますか？」

生徒はまたざわめきだした。

連中の中には『なぜアイツがそんなことを知っているんだ？』的な視線を送る者もいた。

「違わないが……なぜお前がそんなことを知って——」

「誰の！…誰のせいだと思えます？」

俺は嶋崎の発言を遮るように言った。

「ツチ。……お前はなにが言いたい。」

嶋崎は先ほどの発言を遮られたせいか少しいらだった感じの仕草をみせた。

「どうやら…部員が来ない理由は貴方にあるらしいですよ……？」

嶋崎は鼻で笑った。

「俺に、だと？」

「……そう貴方です。貴方は…部員に向かって恐喝していたらしいですね。…なぜですか？」

「あれは…あいつらがチンタラ練習やってっからだよ、あこで罵声を浴びせるのは普通だろ。」

「それはそれでいいですよ？もちろん。…でもバットを持って脅すのはおかしくないですか？…直接的に打撃は与えてはいませんが…はつきり言ってこれは限りなく生徒に対する暴行に近いと思いますよ？」

「……。」

ついに黙り込んだ。

そこで俺は最後の追い討ちをかける。

「……このまま行けば野球部を再起できるかもしれん。」

「さらに……。」

嶋崎は「まだあんのか」と言う。

「……貴方、部員にパシ使ったことあるらしいですね。これもいけないと思います。」

するとまた嶋崎は鼻で笑った。

「ハンツ！俺の部員だ。俺が部員に何をさせようと勝手だろ！」

「……！？」

今の発言に俺はつつかかった。

「……『俺の部員』という部分。」

今のはまるで部員は嶋崎の玩具のような言いぐさじゃねえか。

「……。」

その一言で怒りが込み上げた。

「部員は…部員は貴方の玩具ではないんですよ！？……こんなクソ顧問なんかがいるから部員が来なくなっただと思いますよ！？」

ガマンの限界がきたのか……嶋崎もブチ切れた。

「…お前はさつきからの面さげてそんなこといつてんだ！ああ！？何様のつもりだ！？」

「……やべ、いいすぎたか。」

嶋崎は殴りかかろうとする、

俺は反射的に目をつむり両手を出し顔を守るようにもってくる。  
その時、2年C組に誰かが入ってきた。

「あゝ、嶋崎先生ゝ、ここに誰か来ませんでし…ってああっ！」  
斎藤さんだった。

俺のエナメルを片手に持っている。

「や、止めてください！嶋崎先生！なにやってんすか！？」

斎藤さんはエナメルをほうり捨て、嶋崎を止めにかかった。

「はなせ斎藤！こいつには色々としつけなければならねえ！」

「だからって殴ろうとするのはおかしいでしょ！…おい！その男子！嶋崎先生を止めてくれ！」

「は、はい！！！」

補習生徒の中にいる男子が全員で嶋崎先生を止めにかかる。

俺は尻もちをつき、口をバカのように開けポカーンとさせた。

斎藤さんは俺に歩みよる。

「だ、大丈夫かい？桜井君。なぜこんなことになったかは…理由はなんとなく分かる。とにかく、校長室にいこう。」

「あ…はい…」

俺は立ちあがり、斎藤さんに従い2年C組から出ていった。

……と、その時。

誰かとすれ違った…

あの美形の女子だ。

俺とすれ違ったその女子は驚いた顔をしていた。

## F i f t h

斎藤さんは校長室を二回ノックし、ドアを開けた。

「失礼します、校長。」

大きな窓から外を眺めていた校長がこちらを向く。

その校長は眼鏡をかけていて七三分けの白髪、年齢は50代後半くらいだと思われる男性だった。

俺は斎藤さんの隠れるように後ろにつく。

「おお、望君じゃないですか……先ほど、なにか問題があったそうですね……どうしたのですか？」

校長の思いもよらぬ発言に俺と斎藤さんは顔を見合わせて驚いた。

「な……なぜそれを校長が知っているんですか!？」

斎藤さんは俺の思っていることを代わって言った。

いや、しかしなぜこの校長は知っているんだ？

……まさか一部始終を見ていた、とか……？

すると唐突に校長はにやけやがった。

「私はなんでも分かるですよ……フッフ……」

……気味が悪い。

隣にいる斎藤さんも俺と同じことを思っているのか、表情にでていた。

「……あ、あ。」

そんな俺達の反応を見た校長は冷や汗をかき始める。

そして……。

「すまんすまん……」

と謝罪の言葉を告げ、1回咳払いをし、話しを続けた。

「……実は言うとな、さっき2年C組の男子生徒がここに飛び込んできて『嶋崎先生が来校者に殴りかかろうとしている』という事を教えてくれたのですよ。」

……なるほど、なら納得だな。

「それで……一つ…分からないことがあるのです…」

急に校長が真剣な表情を浮かべる。

「……なんでしょうか？」

斎藤さんは聞きかえした。

「その来校者が誰なのか分からないのですよ、会ってなぜそんな事になったのかをお話したいのですが…」

「……ああ、それですか。」

「……何か心あたりがあるのでしょうか…望君？」

校長は頭の上でクエスチョンマークを浮かべる。

「……いや、この展開は…完璧に俺が出るフラグがビンビンに立っているじゃねえか……。」

「それならこの方ですよ、校長。」

「…！？」

そっぴい斎藤さんは後ろにいる俺を自分の横の所にもってきた。

「……やっぱり。」

「ほほう…君ですか……。……立ち話もなんでしょう、ここのソファに座ってください。」

そっぴい校長はソファを指し、斎藤さんは「それじゃあ座らせていただきます」と一言述べ、座った。

俺もその隣に座る。

現在の状況を説明すると……斎藤さんの隣に俺が座り、向かいに校長が座る。

その中央に長方形の机があるという感じだ。

「……。」

「……つてか……むしようにこの校長が俺の目を見てくるんだが……そんな見られるとだな。」

「……あゝ。」

「……じー。」

「……うっ。」

「……じー。」

「あゝ……あ……。」

……目のやり場がなかった。

それから……20秒は凝視されただろうか……。

「……とりあえず……君の名前を教えてくださいませんか。」

と、校長は俺から視線を外した後、そんなことを言いやがった。

で、いうかさっきの間は一体……！？

「……。」

仕方なく俺は校長の質問にどうと答えた。

「……桜井千尋と言います。」

とたんに校長は眉をよせた。

「ん……？君が明日転入してくる桜井千尋君でしょうか？」

「……あ、はい、その通りです。」

「……君が……なぜ2年C組にいる嶋崎先生の所に行ったのかね？」

テンポ良く質問を投げてくる校長。

まあ、別にこういった面接系は苦手ではないのだが……さっき凝視

された分、やたらと目を合わせて離しにくかった……。

「……。」

まあ、とりあえず……俺は落ちついた表情で事情を話すか。

「実はですね——」

俺は先ほどあった出来事を何もかも話した。

目の前の校長は相槌をうちながら俺の話聞いていた。

……そして話が終った。

「ふむ……事情はおおむね理解しました。確かに……嶋崎先生の野球部

への指導には生徒の保護者から苦情がくるほどの問題がありました。

ですが……」

……俺は眉をよせる。

「……ですが……なんですか？」

校長は俺の発言を一拍おいてから話す。

「この問題は……君が口をはさむ必要性はありましたか？」

「え……。」

俺は黙り込んだ。

反論の意義ならいくらでも頭に思いつくんだが……。  
なぜか出来なかった。

「……桜井君……君はこの野球部に入部する身で関係があるかと思われませんが……実は言うとな関係ないのですよ。君はまだこの本校に正式に転入したわけでもなく、そして正式に部に入っているわけでもありません。いくらここの野球部に過去の悪い話があったとしても……関係ないものは関係ないですよ。……そこらへんを分かってください。私の方からも嶋崎先生を指導しますから。」  
「はい……。」

あゝ、そう言われると……納得せざるおえない言い分だな。  
一見俺は野球部入部するから関係あると思われるが……俺は被害者でも加害者でもない結局は無関係側の人間だからな……。  
「……。」

……なるほど校長の説得力があるね。流石大人、うん。  
そんな俺は心の奥底で反省をし、俯いた。

「それと……望君。」

「え……あ！はい！なんでしょうか？」

斎藤さんは急に話を振られたせいか少し反応が遅れる。

「桜井君の話を聞くかぎり……望君が嶋崎先生の件を吹き込んだようですね。」

斎藤さんは冷や汗をかく。

「あゝ、えつと……は、はい……そうです……ね。」

「あまり……彼の肩の荷を重くしてやらないでくださいね？……彼は野球部に入部するのにこの件を教えてしまったては、やりにくいですから。」

「あゝ。は、はい……今後からは気をつけます。」

斎藤さんも俯く。

そんな俺達を見て校長は唐突に笑った。

「ははは。顔を上げなさい桜井君、望君。」

俺と斎藤さんは同時に顔を上げる。

校長は立ち上がり、校長机に置いてある紙とペンを手に取り戻ってくる。

「ま、ともあれ……君は明日から転入してくるんだから胸を張ってください。」

校長は長方形の机の上に手に取ってきた紙とペンを置く。

……なんだ、これ……？

俺はその紙が何の内容か覗き込んだ。

「へ……！？」

その紙は……入学許可のサインだった。

「ここに君の名前を書いてください。」

あゝ、その、つまりなんだ……？

この俺が転入していいってことなのか？

……問題を起こしたのに？

転入手続きをするためにやってきた俺がいきなり教師と暴力沙汰を起こす時点でもう拒否されるのが当たり前だろう？……普通は。

しかし校長は……。

「なにを言うのですか、このくらいの件で転入を取りやめるなんて思ったのですか？」

いや、普通は思うでしょ……。

すると校長は笑った。

「ははは、安心しなさい、こちらにも非が無かったという嘘になるので……そのくらいで取りやめにはなりませんよ。……しかし、こんな事態を招いた望くんは……どうなるかは保証はできませんが……。」

校長は苦笑しながら斎藤さんを見た。

その視線に気付いた斎藤さんは急に慌てだす。

「えゝ！ちよつと待ってくださいよ！冗談ですよね？」

「冗談ですよ。」

校長の即答に俺は必死に笑いをこらえながらペンを持ち名前を書い

た。

「ふむ…よし、これでいいでしょう。」

俺はペンをそつと机に置いた。

と、まあ…これにて無事に転入出きるようになった。

ふう、一件落着つてか？

「それと…君が入部しようとしている野球部が今後どうなっていくかは分かりませんが…健闘を祈りますよ。」

急にそんなことを言った校長は俺の肩をポンツと叩く。

まあ、こんな最悪な状況の中で入ってしまったことは不幸なことなんだが…。

いちを、ここから何事も切り開いていくのが俺流だ。

現に錫風高校でも俺流でいった結果優勝に導けたからな。

「……。」

とりあえず…なにか小説やらに載ってそうなかっこのいいセリフでも吐きすてとくとするか。

「……はい。何事も…この俺が道を切りひらいて絶対甲子園で優勝したいと思います！」

と、ありきたりそうなセリフを一言。

我ながらシンプルすぎたな……。

「……。」

だが…なぜか今の俺の心の中ではそんな自信に満ち溢れてきた。……なんだろう、なにかやる気が出てきたな。

校長は微笑んだ。

「うむ、期待していますよ。…桜井君。」

そう言い、校長は入学許可書にハンコを押した。

後に、俺と斎藤さんは校長室を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4882g/>

---

—青空の下で—

2011年1月9日02時32分発行